

年間第26主日

第一朗読 アモス 6・1a、4-7

第二朗読 一テモテ 6・11-16

福音朗読 ルカ 16・19-31

2025.9.28 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日の福音では、有名なたとえ話のところが朗読されました。たとえ話全体のテーマとしては、神様が望んでいることは、人がそれぞれ自分のことばかりを考えるのではなくて、近くで苦しんでいる人に目を向けることができるようになる、それが神様の望みなんだっていうことを、イエス様が印象深い物語に託して語ってくれていると思うんですけど、今日特に注目したいのが、回心っていうことを——一人ひとりの心を悔い改める——回心っていうことをこのたとえ話を手がかりに考えてみたいんです。

このお話に出てきた金持ちは、生きているときには贅沢三昧、そして死んだら今度は苦しみの中に置かれた。そしてそれは、「あなたは生きてるときに楽しんでいたから今度は苦しむ番なんだ」って、信仰の先祖であるアブラハムに言われているわけです。それで回心したかって言うと、よく見ると、生きてるときと死んだ後も心は変わってないんですね。つまり、自分のことしか考えていないという点では、全く死んだ後も——死んでも治らないって言いますかね——ところなんです。つまり、生きてるときにはいっぱい財産があるから、これが食べたい、ああいうものを着たい、こういうことをしたい、それをずっとやっていた。死んだ後は、今度は苦しみの中で自分がいかに苦しいかっていうことだけをアブラハムにひたすら訴えていますね。そして、アブラハムから、「ここにいるラザロは生きてるときに苦しんでいたじゃないか」って、そう言われても、そのことに、「ああ、本当にラザロに対して悪いことをしたなあ。本当に門前にいたのに全く心にもかけなかった」っていうラザルに対する気持ちってないんですよ。むしろ、生きていたときとおんなじようにラザロを下に見て、なんかこう遣いばしりできる人みたいな感じで、「ラザルを遣わしてください、自分のところに。それがダメだったら、まだ生きている兄弟たちのところに遣わせて

ください」みたいな、他の人を下に見て、信仰の先祖アブラハムとは話すけど、ラザロには声もかけないし、悪かったっていう気持ちもない。でもこういう苦しみに合わないように、「あ、失敗したな。自分は失敗した。だから兄弟たちは失敗しないように言い聞かせてください」っていう、その苦しみに合わないように、苦しんでいた誰かのことを思いやるっていうことではないんです。

でも、神様が望んでいるのは、お互い同士が自分が苦しみに合わないように、さらに地獄に落ちないように、そういう良いことをするっていうんじゃなくて、本当に他の人のことを自分のことのように気遣う、心と心が繋がるっていうことを望んでいるのっていう、そういうことですよね。

でも、これはたとえ話の話だけじゃなくて、たとえばわたしたちが赦しの秘跡の準備で、心の今までの行動を振り返る「良心の救命」ってしますね。その時に、「あの時悪かったかな」って思い起こす、自分が罪を犯した瞬間って思い起こすけど、その中に本当に相手に対して悪かったかなって思うときもあるかもしれませんが、一方で「ああいうことをしてしまったのは、自分の評判に傷をつけるな。回り回って損をするような愚かな行動をしてしまった」っていう反省のそういう動機が、そういうようなものであるっていうことも多いのではないかなと思います。それは、ある意味では、本当の回心というよりは、やっぱり心の中は自分の方に向いている、自分が周りの人からどう思われたかなっていうことが気になるっていう、相手を傷つけてしまったかもしれないとか、相手のことを分かってあげられなかったっていうようなこと以前に、自分の評判がどうだったかなみたいなことから振り返ってしまうっていうことも多いかなと思うんです。

どうしたらお互い同士のことを本当に心から思い合える、そういう心になるのか。アブラハムは、このたとえ話の中ではもう諦めてますね。諦めてるというか、もう無理なんだと、そういう心もう越えていけないんだと、誰か死んだ者が生き返っても、そういう心の人にはもう変わらないんだっていうことを言う。だけど聖書はこれで話が終わってるんじゃないですね。イエス様は諦めないんだと、そして、死んで復活しても耐えず人々を呼び続けるっていうね、それが救いなんだっていうふうに福音者は続いていきますけど、だから本当に自分が痛い目に合わないようっていう恐怖とか自分の評判とかそういうことではなくて、相手のことを思う心っていうのはイエス様

からいただかなければわたしたちの中にはないし、そのイエス様は愛と赦し通してそれを一人ひとりの中に、つまり罰ではなくて愛と赦しがなければ、本当に納得して心変わらないんだと。でもそれがあつたとしても、人間の心はいかに頑なかということ^ををわたしたちはよく知っているわけですね。

だから神様による清めっていうのは、何か苦しい罰というよりは、本当にいかに自分が愛されていたか、そして赦されていたか^まっていうことを目の当たりにする、そういう体験なのではないかなと思います。わたしたちが、イエス様により深く出会うことを通して、その心を一人ひとりの中に本当に頂いていくことができるまことの心の恵みを願いたいと思うし、またお互い同士がそこに向かって、神様がそういう関係と呼ばれているんだと、そのためにもし神様の道具として愛や赦しを他の人に伝えることをお望みならば、それができるようにわたしたち自身を導いてくださるように、そしてお互いの関係を導いてくださるように恵みを願いたいと思います。

最後になりましたけど、今日は、カトリック教会の中では「世界難民移住移動者の日」という、世界中で故郷を離れている人たち、または離れざるを得ない人たちに思いを馳せて、お互いに排除し合うのではなく助け合う、そういう心と、そして実際の行動を世界が育んでいくことができるように、またわたしたちの心も、他の人との間に深い溝を作るのではなく、イエス様が橋を架けてくださるように願う、そういう日でもあります。

このことだけではないわけですが、お互い同士の中にお互いを隔てる淵に神様の恵みによって橋が架けられ、そして本当に互いに思い合う、そういう関係を育むことができますように、このごミサを通して恵みを願い合いたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>